

中部の

エネルギーを  
築いた

人々

「ガス博士」「ガス王」と言われた  
名古屋瓦斯・東邦瓦斯社長 岡本 桜

岡本桜は、明治11年4月、兵庫県大書記官、岡本貞の次男として神戸に生まれた。幼少より英明で、同志社普通部を経て、第一高等学校、東京帝国大学工科大学へ進み、明治36年、応用化学科を優等の成績で卒業した。卒業論文「セルロイドについて」は『工業化学雑誌』に連載された。恩師高松豊吉博士の紹介で、明治37年5月、大阪瓦斯創業時の建設工事にに関わり、外人技師ミラーの下で瓦斯技術の腕を磨いた。明治39年には名



岡本 桜

古屋瓦斯に入社し、以降29年間、技術者、経営者として名古屋瓦斯・東邦瓦斯の礎を築き、顧客・株主・従業員を三位一体とし、公共奉仕を目指す岡本精神を定着させ、事業発展の道筋をつけた。石炭価格の高騰時には業界全体の対応策を取り纏め、「ガス博士」と称された。東邦ガスの社内報「桜和」は岡本桜の名前に因んで付けられたものである。

岡本は、昭和10年2月、多くの人に惜しまれながら、58歳の生涯を終えた。

## 名古屋瓦斯・東邦瓦斯の経営



恩師 高松豊吉博士

明治39年9月、恩師高松博士(後に東京瓦斯社長)の紹介で名古屋瓦斯(社長：奥田正香)の技師長に就任し、建設工事の責任者として、明治40年10月の開業にこぎつけた。明治44年には取締役昇進、技術者として高圧供給方式の採用、ガス漏洩防止策の徹底など事業の効率化を進めたほか、経営者として創業時の多難な課題に取り組んだ。1つは、ガス灯・電気灯の争覇戦である。当初割安だったガス灯は、金属線電球の発明で経済

的優位を失い、名古屋電灯と和親協定を結び(大正3年11月)、熱用需要中心へと方向転換を進めた。もう1つは、第1次大戦期における石炭価格の高騰で、ガス業界は原料高に苦しんだ。岡本は、全国ガス業者の組織、帝国瓦斯協会のもと石炭高問題に取り組み、ガス



名古屋瓦斯本社

料金引き上げへの世論喚起をはかり、危機を乗り切った。

大正10年6月に名古屋瓦斯社長に就任した。市域が拡張するなかで設備投資を進めるため、関西電気(後の東邦電力)との資本的な統一を決断し、大正11年6月、一旦関西電気と合併した上、別途瓦斯事業を分離して新生東邦瓦斯が誕生した。岡本は全国に先駆けて熱量販売制を導入し、名古屋市との報償契約を改定し(昭和7年8月)、改定後に東山植物園建設のため25万円の寄付を申し出た。また、東邦電力の有する地方ガス事業を引継いで、四日市、一宮、半田地区へ事業を拡大し、また同社が九州に有したガス事業の経営を引き受けた。これらの事



南大津町営業所(左)と瓦斯応用実験場

業が軌道に乗ると再び再編成をはかり、昭和5年8月には四日市地区を譲渡して合同瓦斯が誕生し、同年12月には九州地区のガス事業を分離して西部瓦斯が創設された。

## 全国のガス事業に関わる

岡本は創設期の大阪瓦斯の設備建設に関わり、東京の千代田瓦斯の立ち上げに尽力し、京都瓦斯はじめ四国・山陰から九州地区のガス事業の経営に関与し、その活躍は全国に及び、「ガス王」と呼ばれた。昭和2年7月、東京瓦斯取締役任に、5年4月には同副社長となって、社長岩崎清七を助け、「焦眉ノ問題タル増資ヲ為シテ資金ノ途ヲ開キ瓦斯料金ノ値下ヲ行ヒテ市民ノ希望ヲ容レ進シテ熱量販売



岡本先生頌徳之碑(東京多摩霊園)



岡本桜胸像  
(東邦ガス本社内に設置)

制ヲ実施シ会社百年ノ計ヲ樹立」(岡本先生頌徳之碑)したとされる。

岡本はまた、松永安左工門に請われて昭和2年5月から8年5月まで、東邦電力の取締役・専務取締役に就任、東邦電力の分身東京電力と

東京電灯との東京市場を巡る争覇戦の処理に当たり、また四日市地区の分離による合同電力の設立、豊橋地区の分離による中部電力の設立は岡本のリーダーシップのもとに推進された。

(浅野 伸一)